

福島県民の皆様へ

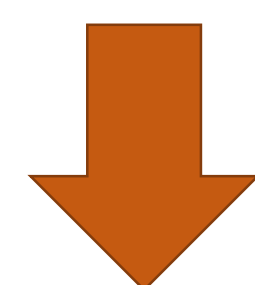
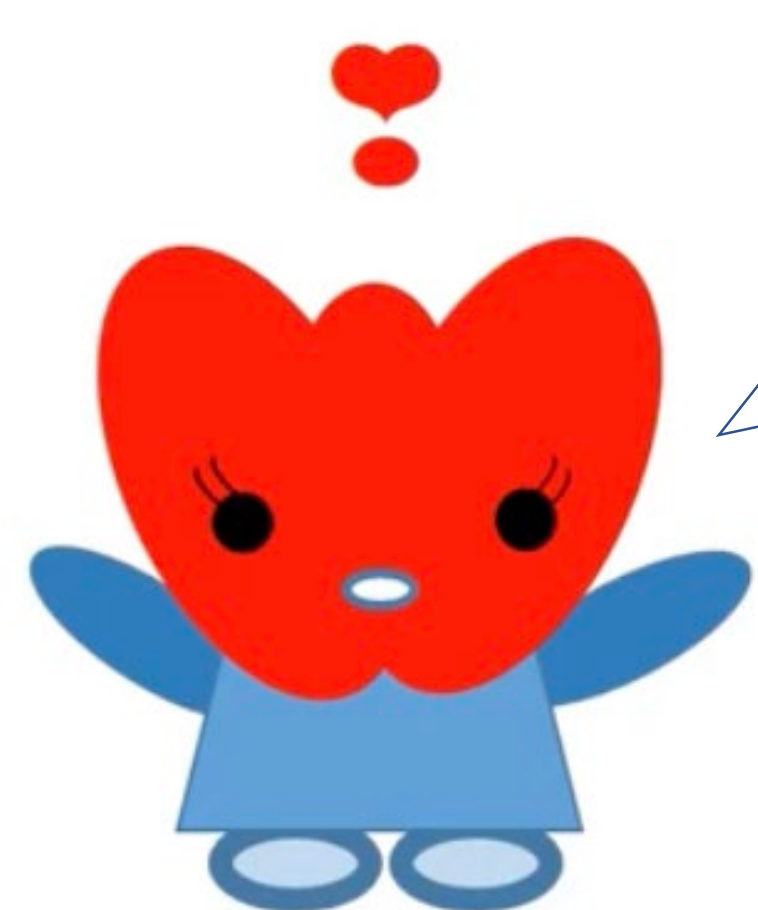
Vicki Schnadig先生からのメッセージ

福島県民の皆様へ

2011年3月11日の地震と津波は、悲しいことに多くの犠牲者、ストレス、不幸をもたらしました。その後の原発事故は、生活へ混乱、さらなるストレス、広範な恐怖を引き起こし、悲劇をさらに深刻化させました。福島県の甲状腺がん超音波検査プログラムは、住民の皆様を慰め、安心させることを願って実施されました。しかし、この事業に携わり、子どもたちの健康と将来を深く気遣う日本人の二人の同僚が、検査そのものがかえってストレスや不安、潜在的な危害をもたらしていることに気づきました。私たちの啓発活動は、原子力に関する政治的見解にも基づくものではなく、子ども、思春期の若者、若年成人の健康と未来を擁護したいという願いから行っていることをご理解ください。甲状腺がん検診プログラム(甲状腺検査)に参加された皆様は、参加されたことに責任を感じる必要はありません。皆様は世界に重要な基礎知見を提供してくださいました。この調査により、無症状の微小な乳頭甲状腺がんが、従来考えられていたよりもはるかに若年層に多く存在することが判明しました。小児甲状腺がんの自然経過や、無差別なスクリーニングが有害となり得る理由を理解する上で、皆様の貢献は大きいです。謝罪すべきはむしろ私たち医療者の方だと考えています。甲状腺スクリーニングプログラムは善意に基づくものでしたが、残念ながら十分な情報提供なしに実施されました。甲状腺がん検診研究と調査を開始する前に、潜在的な参加者には以下の点について十分な説明がなされるべきです。1. 研究の目的(知識の獲得以外に利益がない可能性を含む)を説明すること。2. 参加前に、被験者とその保護者が質問し、回答を得られる機会を保証すること。3. すべての潜在的な参加者に、参加を拒否する権利があることを伝え、拒否した者が孤立感や罪悪感を抱かないようにすること。4. 過剰診断を含む潜在的なリスクを十分に説明すること。疫学研究によれば、ほとんどの甲状腺乳頭がんは自然治癒性または緩徐進行性であり、放射線被曝の可能性にかかわらず、スクリーニングは過剰診断をきたします。スクリーニングで発見された甲状腺乳頭がんの中には、過剰診断でなく数年後に症状が現れたり触診で発見されるがんが含まれる可能性もありますが、そのほぼ全てがその時点で治療可能です。このため、無症状の小さな癌の早期発見・治療は、不必要な手術や時期尚早な手術、不安や社会的烙印(スティグマ)をもたらし、子どもから何年もの無邪気な生活を奪うことになるかもしれません。これらの癌の早期発見が命を救う、あるいは生活の質を向上させるという決定的な証拠はまだ存在しません。最後に、知識は力なり！あらゆる医学研究の対象となる可能性のある人は、参加するか拒否するかの権利を持っています。これらの決定は、研究の目的、既知と未知の情報、潜在的なリスクと利益について十分な説明を受けた後にのみ行われるべきです。これをインフォームド・コンセントと言います。十分な情報を得た上で参加を選択した者は参加する権利を有しますが、しかし、拒否する者は拒否する権利を有し、その決定によって孤立感や否定的な評価を受けるべきではありません。原子力事故後に教育プログラムの改善を求め、福島県の甲状腺検査プログラムの変更を提唱する医師や科学者たちは、若者の命と福祉を深く気遣っていると確信しています。彼らは政治的利害ではなく、若者の健康と幸福への懸念から行動する専門家です。

2025年10月

Vicki Schnadig医学博士



Schnadig先生はテキサス大学の病理学の名誉教授です。2018年に病理学の雑誌の論説に、福島の甲状腺検査と過剰診断に関する懸念を記載されました。以来、現在まで福島の甲状腺検査について深く洞察され、2024年に私たちと共著で本を出版しました。



OVERDIAGNOSIS
OF THYROID CANCER
IN FUKUSHIMA

SANAE MIDORIKAWA
TORU TAKANO
AKIRA OHTSURU
VICKI J SCHNADIG

Akebishobo

Schnadig先生によるあとがきより

本書の目的は原子力利用の賛否を論じるものではない。我々は、福島の甲状腺検査のような調査はその有害性を継続的に監視し、その有害性を認め、適切な修正を行うべきだと主張する。たとえその大義がどれほど崇高であろうとも、不正確または偏った情報が大義の支持に使われた場合、その大義がいかに価値あるものであっても、その情報は守ろうとしている社会の構成員に害を及ぼす可能性があります。

(中略) 共著者たちと協力し、彼らの多くの出版物を読んだ後、彼らが福島の子どもの健康と幸福を心から気にかけていることが私には明らかになった。本書を読んだ後、他の人々も私の見解に同意してくれることを願っている。